高等学校等における
オンライン国際交流の事例
～海外の高等教育機関との国際交流の事例

文部科学省
MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

姉妹校・海外の大学・企業との連携による取り組み 【青森県立青森高等学校】

SGH後継事業である本校独自のSTAGEプログラム（シンガポール・台湾）、SSH海外研修（ベトナム）が中止になったため、代替プログラムとして冬季休業を利用して、オンラインを活用した冬期集中講座を実施した。また、グローバル人財育成の目的で、２月下旬にシンガポール・台湾・ベトナム・マレーシア・タイ・日本を結んだパネルディスカッションを本校５会場で同時に実施した。

【プログラムの内容】

① STAGEプログラム代替事業　冬期集中講座

少子高齢化と労働力不足が深刻化する地方都市で、外国人との共生を促進しつつ、労働人口の減少にどう対応するかを、「生活環境」、「労働環境」の面から研究する。その過程で、海外で活動する日本人、同様の問題に直面する国（台湾）、先進的な取り組みを行っている国（シンガポール）より意見や情報を得て、研究の深化を図る。

② SSH海外研修代替事業　冬期集中講座

「医療問題」、「環境問題」、「先進科学技術の応用」の3点でベトナムの大学・高校と交流を行う。生徒は日頃の実験や分析の成果をプレゼンテーションしたり、意見交換を行ったりすることで、研究の深化を図る。

【工夫した点】

・生徒主体のICTエキスパートチームを組織し、発表者のサポートや機材の調整を自立的に行うことができる体制を作った点。
・ライブ感を大切にしつつ、会議の形態を多様にした点。（国内にいる外国人には可能な限り来校してもらい、日本人とともに同じ場所からオンラインで外国とやりとりする。）
・モバイルルーターとプリペイドsimの導入により、校外からオンタイムで情報発信できるようになった点。
・Webカメラではなく、ビデオカメラ、スイッチャー、PCを使うことで、発表者の表情を豊かに伝えられるようになった点。
・BlueTooth対応の会議スピーカーの導入で、比較的離れた場所に座っている参加者にも発言の機会が多く与えられた点。
・相手国の状況に合わせ、会議のプラットフォーム(Zoom, GoogleMeet等)の操作方法を教員間で共有した点。

【今後の課題】

・通信環境のさらなる整備（事業の度に機材を運搬し、会場を設営する時間と労力の軽減）
・通信速度の向上
・フィールドワーク時の校外での安定した通信環境の確保

【経緯】

2014（平成26）年度　SGH指定
　　青森中央学院大学留学生との交流開始
2015（平成27）年度　シンガポールナンヤン高校との交流開始
2017（平成29）年度　僑光科学技術大学（台湾）と交流締結
2018（平成30）年度　ホーチミン市天然資源大学・ホーチミン工科大学との交流開始
2019（令和元）年度　華盛頓高級中学（台湾）との交流締結
2020（令和２）年度　上記学校参加によるパネルディスカッション実施(令和３年2月)

海外の大学との連携による取組み　【秋田県立横手高等学校】

秋田県横手市が進めている国際的産学官連携プロジェクトと共同し、本校生徒とプロジェクトに参加している台湾の大同大学の学生が、それぞれの地元を紹介する観光ＰＲ動画を作成し、紹介し合った。作成したＰＲ動画はインターネットで公開し、お互いが視聴し、評価し、審査結果をオンラインでつないで伝え、交流した。（使用言語は英語、日本語、中国語）

【プログラムの内容】

・事　業　名　：大同大学×横手市　動画でPR!コラボ☆授業　（横手市国際的産学官連携プロジェクト）

・事業の流れ：５／５　　大同大学の学生とオンラインで台湾のイメージについて意見交換する。

６／１１～　大同大学の学生が作成した台湾観光ＰＲ動画を、本校生徒が視聴し、評価する。

６／２３　　大同大学とオンラインで結び、ＰＲ動画の感想・評価を伝え、審査結果の発表をする。

８月～10月　本校生２５名１１グループがそれぞれのテーマで横手市観光ＰＲ動画を作成し、横手市役所のYouTubeで公開、大同大学の学生が視聴し、審査・評価する。

１１／１３　横手市観光ＰＲ動画を題材にし、本校生徒と大同大学学生がオンラインで意見交換する。

１１／２０　大同大学とオンラインで結び、大同大学学生らによるＰＲ動画の審査結果発表を行なう。

【工夫した点】　横手市総務企画部と商工観光部、及び情報通信を手掛ける企業と連携し、様々な場面で助言指導を得た。

【今後の課題】　新型コロナウィルス終息後の具体的な連携のあり方を相互に意見を出し合って立案していく。

【経緯】

平成３０年４月	スーパーサイエンスハイスクールに指定される。
平成３０年８月	大同大学の学生が来校し、お弁当作りなどを通して異文化交流をスタートさせる。
令和　元年８月	大同大学の学生が来校し、部活動体験などの異文化交流を継続する。
令和　２年４月～	国際的産学官連携プロジェクトに参加する。

海外の大学との連携による取組み 【埼玉県教育委員会】

例年県の事業で実施している県立高校生海外派遣プログラム「グローバルリーダー育成プロジェクト」の中止を受け、代替事業として県教育委員会主催の「オンラインによるハーバード大学・卒業生との交流会」及び「グローバルリーダー育成プロジェクト参加卒業生との交流会」を実施。県内の高校生３８名が参加。2021年（令和3年）1月24日（日）の午前中の時間帯で実施。

【プログラムの内容】

・実施日　令和３年１月２４日（日）午前９時～１２時半

第１部：「オンラインによるハーバード大学・卒業生との交流会」

－ハーバード大学生・卒業生代表によるミニ・レクチャー

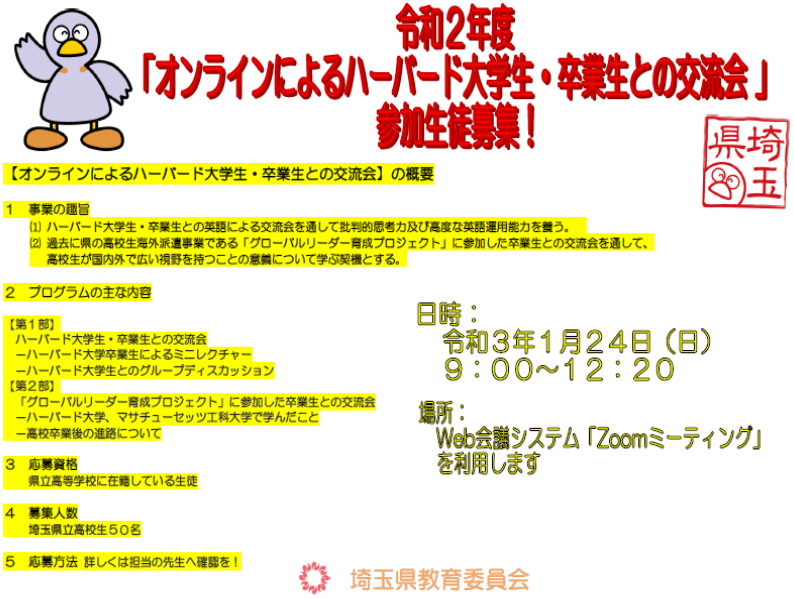
－グループ・ディスカッション

テーマ：”How should society adapt the COVID-19 situation?”

第２部：「グローバルリーダー育成プロジェクト参加卒業生との交流会」

－過去にハーバード大学等派遣プログラムに参加した卒業生と高校生との座談会

テーマ：ハーバード大学等を訪問して影響を受けたこと、派遣プログラムが進路選択にどう影響したか等



【工夫した点】

・日本時間と現地時間で双方が交流できる時間を設定したこと。

【今後の課題】

・様々なテーマでディスカッションができるよう交流の日数や時間の拡大

【経緯】

2011年 (平成23年)度～2019年(令和元年)度	県立高校生を米国ボストンのハーバード大学等へ派遣するプログラム「グローバルリーダー育成プロジェクト」を実施。基調講演や英語集中研修等の国内研修を経て、毎年11月に40～50人を派遣。令和元年度までに389名を派遣。
2020年(令和2年)4月～11月	新型コロナウイルス感染症の影響により上記事業の中止が決定。10月に代替事業として県教育委員会主催の「オンラインによるハーバード大学・卒業生との交流会」及び「グローバルリーダー育成プロジェクト参加卒業生との交流会」の開催を検討。11月に要項等を県立高校宛通知。
2021年(令和3年)1月24日	「オンラインによるハーバード大学・卒業生との交流会」及び「グローバルリーダー育成プロジェクト参加卒業生との交流会」実施。38名の高校生、6人のハーバード大学生・卒業生、4人の卒業生が参加。

海外の大学との連携による取組み 【東京都 吉祥女子高等学校】

オーストラリア　クィーンズ大学のオンライン講義に参加しました。オーストラリアの姉妹校で実施するオーストラリアセミナーでは、校外学習としてオーストラリアの名門クィーンズランド大学での講義体験を予定していました。計画の途中の段階でCOVID-19の影響でツアーは中止となってしまいましたが、やりとりをしていた大学関係者より、日本の高校生を対象としたオンライン講義の案内をいただき、本講からは８名の生徒が参加し、大学の先生と高校生がリアルタイムで双方向対話型授業を行いました。

【プログラムの内容】

ビデオ会議ツールを用いた双方向対話型授業によるオーストラリアの大学授業体験を5月10日に実施。

1時間目　『ポケットモンスター™』を題材に、応用物理学・細胞生物学の観点からポケモンは実際に創り出すことができるのかどうかを探りました。

2時間目　「畑からフォークまで」農業と食料生産について、公衆衛生・遺伝子組み換え食品・環境管理の観点から学びました。

【工夫した点】

高校生にわかりやすい内容・テーマで、実生活の中にどのように生かされているかを学問的に解説してもらいました。

じっくりと考察する時間もあり、他の生徒とも意見交換ができ、とてもよい学びの経験になりました。

日本の一斉授業とは大きく異なる参加型授業体験が講評でした。

【今後の課題】

第２段・第３段を行うとのことになっていますが、まだ実施できていません。コロナがなくてもこのような講義体験は継続実施していきたいと今後に期待しています。

【経緯】

2019年秋から冬	2020年の夏の研修について企画開始、大学講義体験を計画　大学担当者ともコンタクトをとる。
2020年４月	夏期セミナーが中止となったため、大学側よりオンライン講義の提案。参加者募集の連絡を受ける。
2020年４月	生徒募集
2020年５月	オンラインにて各家庭より生徒が参加。　レポート提出により参加報告。

海外の研究者との連携による取組み 【神奈川県立多摩高等学校】

今年度実施予定だった台湾での研修が中止になってしまったため、その代替として、訪問を予定していた台湾交通大学の平松弘嗣副教授（応用科学系）による講義と、現地の博士研究員と大学院生による生徒探究活動相談会をオンラインで実施した。
平松副教授の研究についての講義を聞き、生徒が探究活動で実施していることを英語で発表した。また、平松副教授と台湾交通大学の大学院生と英語でコミュニケーションをとりながら、探究活動についてアドバイスをいただいた。

【プログラムの内容】

前半：平松副教授の講義「光を使った化学の研究」
後半：英語による生徒の探究活動の発表と質疑応答
　　生徒の発表内容

1年生	Save the world with Spinach!
	木を使って水を濾過する方法
2年生	プラスチックの代替品を寒天や貝殻を用いて自然由来のもので作る
	様々な化粧水とその効果

【工夫した点】

・生徒が無理なく英語で発表できるよう、英語のプレゼンテーションの準備を計画的に実施した。
・講義を受講するだけでなく双方向のコミュニケーションの機会を確保した。
・講義の内容を踏まえて、興味のある生徒が参加できるように案内をした。

【今後の課題】

・定期的に英語で研究成果を発表する機会を設ける。
・英語による質疑応答のやり取りを積極的にできるように事前の準備を充実させていく。
・今後もオンラインによる研修を継続し、日々の探究活動に生かしていく。

【経緯】

2018（平成30）年12月	台湾交通大学平松弘嗣助理教授に交流を打診。
2020（令和２）年１月	本校職員２名が台湾交通大学を訪問し、令和２年度の交流について打合せを行う。
2020（令和２）年５月	新型コロナウイルス感染拡大の影響により、8月の台湾訪問を中止とする。
2021（令和３）年１月	台湾交通大学平松弘嗣副教授によるオンライン講義及び本校生徒による探究活動の発表を行う。

海外他機関及び海外他大学(ｶﾚｯｼﾞ)との提携による取組み【神奈川県 関東学院六浦中学校・高等学校】

オンライン授業となり、コミュニケーション重視の授業が困難になったため、その代替として実施。Google Meetを使い、マレーシアの学生、社会人の方とマレーシアの文化・マレーシアの生活・両国のコロナの影響・将来のキャリア設計・日本の文化生活について話し合い異文化交流を行った。生徒25名を9グループに分け、１グループ2～3名にした。現地の方にも12人集まって頂き１グループにつき、1～2名来ていただきオンライン交流を行った。

【プログラムの内容】

・全体のテーマ：異文化交流コミュニケーション
「マレーシアの文化・生活・コロナの影響・日本の文化について・キャリア設計について」
・実施時間 50分
・目標：英語は英語圏だけのものではなく、世界との共生のためのコミュニケーションツールという事を知り、伝わる喜びを体験する。相手の言っている事が分からない時は、自ら進んできっかけを作り、望ましいコミュニケーションがとれるようにする。

【工夫した点】

・会話を止める練習を丹念に行った。訛りなどで聞き取れない事が想定されたので、”Pardon?”・“Say it again?” など聞き返す表現の練習を行い、ひとつひとつのコミュニケーションを大切にするようにした。

【今後の課題】

・マレーシアとの交流事業の継続性とさらに他国との交流事業の発掘。

【経緯】

2020年1月	コロナが流行のため、オンラインに完全移行
2020年2月	事前指導として、異文化交流の際の質問作り、表現の確認
2020年9月～12月	マレーシアのコングロマリットの傘下である「ＹＴＬホテルズグループ」及び「カレッジ」と交流事業への協議
2021年2月	オンライン異文化交流会実施

海外の大学との連携による取組み 【富山県立小杉高等学校】

米国カリフォルニア大学アーバイン校と、新型コロナウイルス感染症がSDGsに与え得る影響（経済・教育・医療）について、ズームを用いて交流を実施。同校2学年（英語重視コース）の生徒12名が参加し、2020（令和2）年10月～2021（令和3）年2月にかけて定期的（週１回）に40分程度実施。新型コロナウイルス感染症による生活の変化について互いに理解を深め、SDGsの観点からより良い社会の実現に向けた解決策について意見を交換し合った。

【プログラムの内容】

・全体テーマ：「新型コロナウイルス感染症による社会の変化に対して、SDGsの観点から自分たちができることを考える」
・前半：新型コロナウイルス感染症による生活や社会の変化について意見を交換した。また、その変化における日米間の違いを考察した。
・後半：新型コロナウイルス感染症がSDGsの17のゴールに与える影響について意見を交換した。現状を調査した上で、自分たちができることを考察し、互いに報告した。

【工夫した点】

・カリフォルニア大学の担当者とは毎回メールで交流の最終確認を行った。
・生徒が1対1で交流ができる機会を確保した。
・画面共有機能を用いることで、生徒は活発に意見交換を行った。

【今後の課題】

・交流の様子等を同校教員と共有し、交流をより良いものにするための取組を継続していく。

【経緯】

2015（平成27）年	米国カリフォルニア大学アーバイン校とのスカイプ交流を開始。富山県立大学の准教授が運営に従事。英語重視コースを選択した生徒を対象に、約8ヶ月の間に15回程度実施。
2019（平成31）年	SDGsをテーマに取り上げ、達成に向けての解決策について発信。SDGsを普及させるために学校外でも様々な活動を実施。
2020（令和2）年	スカイプからズームに変更。富山県立大学准教授のサポートを受け、小杉高校英語教員がホストとなり運営に従事。

海外の大学および姉妹校との連携による取り組み 【富山県 富山国際大学付属高等学校】

学校主催で毎年実施している海外大学での英語研修および世界６カ国１０校の姉妹校との相互訪問交流が中止された代替として、ICTを活用した各種プログラムを実施し、生徒の英語でのコミュニケーション能力の伸長および異文化理解の機会を確保した。

【プログラムの内容】

・１年生米国研修：オレゴン州の大学による、ライティング、スピーキングスキルを高めるためのオンライン授業および交流（2021年3月 9日間）
・２年生韓国研修：大田市の大学によるスピーキングスキル、ロジカルシンキングを高めるためのオンライン授業および交流（2020年12月6日間）
・姉妹校交流：アメリカ、中国、韓国の４校の姉妹校とのビデオメッセージによる異文化コミュニケーション

【工夫した点】

・１年生米国研修：ホームステイ体験の代替となるよう、ライティングトピックとして現地文化要素を盛り込み、現地学生との交流の機会を設けた
・２年生韓国研修：社会課題に対する多角的視野と論理的思考を養うため、即興型ディベートに挑戦した
・姉妹校交流：ビデオメッセージアプリを使用して相互に自己紹介や学校紹介、文化紹介を実施することで、時差の問題を回避した

【今後の課題】

・生徒個々の能力に応じた、双方向性を確保したプログラムの作成
・海外の学校とのスケジュール調整

【経緯】

1992年7月～2019年7月	第１回米国英語研修実施（２０１９年まで毎年１回、合計２８回実施）
2010年3月～2019年8月	ニュージーランド（１）、オーストラリア（２）、中国（２）、タイ（２）、アメリカ（２）、韓国（１）の６カ国１０校と姉妹校協定を締結し、２０１０年より各校と相互訪問交流を継続実施
2012年8月～2019年8月	第１回韓国英語研修実施（２０１５年を除き、２０１９年まで毎年１回、合計７回実施）
2020年	新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年度のプログラムを全て中止し、オンライン実施に切り替え

海外の大学との連携による取組み 【石川県立金沢泉丘高等学校】

プリンストン大学（アメリカ）の日本語専攻生が来日した際に行ってきた交流会（平成28年より隔年実施）が中止になったため、その代替として、ビデオ会議ツールを用いたオンライン交流会を開催。同校３学年ＳＧコースの生徒39名・プリンストン大学の学生25名が複数の班に分かれて、交流した。内容は、生徒たちによる課題研究（「もったいない食事の消費」・「プラスチックごみのリサイクル」など、ＳＤＧｓに関連したテーマを設定し、２学年から継続的に実施）の発表と、質疑応答が中心。

※ＳＧコース…グローバルリーダーの育成を目指すコース

【プログラムの内容】

《前半》 大学生の進行で日本文化等について日本語でディスカッションを実施。
《後半》 本校生徒の進行で課題研究のプレゼンテーションを英語で行い、質疑応答を実施。

【工夫した点】

・課題研究の内容に話の焦点を絞ることで、議論がスムーズに行われた。
・プリンストン大学教授と本校教諭が共同ホストとなることで、ブレイクアウト中も各グループを巡回（モニタリング）可能にした。
・６会場に分散して実施することで、他グループに気を遣わず、ディスカッションに集中できた。

【今後の課題】

・多様な学生・生徒との交流
（今回はアメリカの大学生が対象であったが、もっと多くの国の学生・生徒と交流の機会を持ちたい。）
・継続的な交流機会の確保
（イベント的な交流ではなく、継続的な交流を通して、互いに学びを深め合うことを目指す。）

【経緯】

2014年（平成26年）7月	石川県の事業「プリンストン・イン石川（ＰＩＩ）」の一環として、本校ＮＳＨ国際交流プログラムを実施。 （以後、２年に１回、本校で交流）※NSH…ニュースーパーハイスクール（県指定校）
2016年（平成28年）10月	本校ＳＧコース海外研修のプログラムにプリンストン大学との交流を導入。 （以後、毎年ＳＧコース海外研修の際、プリンストン大学で交流）
2020年（令和2年）7月	新型コロナウイルス感染症の影響により、大学生の来日が不可能となったため、ＰＩＩをオンラインで開催。

海外の大学機関との連携による取組み 【福井県立足羽高等学校】

例年2年生の2月に実施していた国際科中国語コースの語学研修（台湾）が中止になったため、その代替として、本校元ＡＬＴで中国浙江省杭州市と江蘇省蘇州市の大学で日本語を教えていらっしゃる先生の協力の下、ビデオ会議ツールを用いた交流活動を実施。同校２学年の国際科中国語コースの生徒23名が参加し、2020(令和2)年７月～12月にかけて計2回、 2,3人のグループごとに1時間程度実施。令和3年3月には日本語を学ぶ大学生との交流を実施し、今後定期的に交流を進めていく予定。

【プログラムの内容】

・１回目の交流
目的：「中国事情」第11課で学んだ「上有天堂、下有蘇杭（天には極楽あり、地には地上の楽園と言われる蘇州杭州がある）」という内容の杭州について、理解を深める
内容：教科書で習った内容について理解を深めた上で、事前にグループごとにテーマに基づいて質問を作成し．当日は、互いに簡単な自己紹介を行い、質疑応答を行った。1年半学んできた中国語が実際の場面で活用できた喜びと、中国を身近に感じることができことで、中国語が学習へのモチベーションを高めた。

・２回目の交流
目的：1回目の内容の蘇州について、理解を深める
内容：事前に用意した質問について、全員が会話をするという目的で実施。教科書で学べない内容についても理解できた。

【工夫した点】

・事前に質問したい内容を自分たちで考え、中国語のチェックを受け発表の練習をする。質問内容については事前に共有する。
・全員が発言することと学んだ内容を事後学習としてレポートにまとめる。

【今後の課題】

・単発的な交流でなく、年間を通じて教科の中に取り入れ、タブレットが全員に手渡された後により効果的な交流を実施する。

【経緯】

1991年度～	姉妹校の北京外国語大学において毎年2年生に2週間程度の語学研修を実施する。
2015年度～	Pm2.5を考慮し、国立台湾師範大学において、2年生の語学研修を実施する。
2020（令和2）年6月	新型コロナ感染症の影響により、学校主催の語学研修が中止になったため、ビデオ会議ツールを活用した、中国の大学の先生との交流を検討。
同年7月～12月	オンライン会議を計2回実施。

海外の高校・大学との連携による取組み(world Youth Meeting)【福井県立福井商業高等学校】

日本とアジアの高校・大学の生徒たちが協働して行うワールドユースミーティングが中止となり、その代替として、オンラインでの英語プレゼンテーション大会を開催。国内外から多くの生徒が参加し、2020年9月に2日間の日程（一日8時間程度）で実施。

【プログラムの内容】

・全体テーマ：「SDGs第4目標「質の高い教育」のために私たちがいまできること～Show Your Flags for SDGs 4, Quality Education～」
・日本と台湾（その他アジア諸外国）の学校がそれぞれ1つのチームを作り、6月から3か月間オンラインでやり取りをしながらテーマに沿った英語プレゼンテーションを作成。
・一日目：Microsoft Teamsを用い、1チーム7分でプレゼンテーションを実施。その後質疑応答。
・二日目：全体で選ばれた上位4つのプレゼンテーションを見る。その後、Zoomで部屋に分かれて英語ディスカッション。それぞれの国特有のパフォーマンス鑑賞、カジュアルな話題について話すカフェトークを実施。最後に全体での表彰式。
※福井商業高校の生徒からは「多くのアジアの生徒と英語で交流ができ楽しかった。自信がついた。さらなる英語学習への動機づけになった。プレゼンテーションを通して海外の生徒の状況や意見を聞けて勉強になった。」という意見多数。

【工夫した点】

・事前にMicrosoft teamsでリハーサルを兼ねた交流を何度かを実施。
・LINEグループを作り、生徒同士が日常的な交流・意見交換を実施。
・大学の教授から、オンラインでの質疑応答の適切な答え方などをご教授いただく機会を確保。
・事前にディスカッショントピックを共有、準備の時間を確保。

【今後の課題】

・自宅等でインターネット環境が整っていない生徒へのさらなる支援

【経緯】

2000年4月	日本福祉大学影戸誠教授主催による、日本と台湾の英語プレゼンテーション大会「ワールドユースミーティング」を開始。その後日本を含む多くのアジア諸国の参加が増えていった。ホームステイプログラムを入れ、台湾の生徒が日本に来て交流を行う形が主流となった。
2020年5月	新型コロナウイルス感染拡大の懸念、長期休校の影響から、ワールドユースミーティングのオンライン開催を決定。
同年6月	パートナー校を決定。各校ごとにオンライン交流を開始。
同年9月	ワールドユースミーティング、初のオンライン開催。

海外の高校・大学との連携による取組み(Asian Students Exchange Program(ASEP))【福井県立福井商業高等学校】

日本とアジアの高校・大学の生徒たちが協働して行うASEPが中止となり、その代替として、オンラインでの英語プレゼンテーション大会を開催。国内外から多くの生徒が参加し、2020年12月に2日間の日程（一日8時間程度）で実施。

【プログラムの内容】

・全体テーマ：「Invisible Weapon」
・日本と台湾（その他アジア諸外国）のがそれぞれ1つのチームを作り、10月から3か月間オンラインでやり取りをしながらテーマに沿った英語プレゼンテーションを作成。
・一日目：事前に作成したビデオプレゼンテーションを流し、その後Microsoft Teamsを用い質疑応答。
・二日目：全体で選ばれた上位4つのプレゼンテーションを見る。その後、Zoomで部屋に分かれて英語ディスカッション。最後に全体での表彰式。
※福井商業高校の生徒からは「台湾の生徒の英語力に驚いた。オンラインで議論を知る難しさを知った。質疑応答では、どんな質問が来るか事前に台湾や日本のメンバーとのやり取りを重ね、テーマについて深く学ぶことができた」という意見多数。

【工夫した点】

・事前にMicrosoft teamsでリハーサルを兼ねた交流を何度かを実施。
・LINEグループを作り、生徒同士が日常的な交流・意見交換を実施。
・大学の教授から、オンラインでの質疑応答の適切な答え方などをご教授いただく機会を確保。
・事前にディスカッショントピックを共有、準備の時間を確保。

【今後の課題】

・自宅等でインターネット環境が整っていない生徒へのさらなる支援

【経緯】

2000年12月	日本福祉大学影戸誠教授主催による、日本と台湾の英語プレゼンテーション大会「ワールドユースミーティング」の日本版として、ASEPを開始。その後日本を含む多くのアジア諸国の参加が増えていった。ホームステイプログラムを入れ、日本の生徒が台湾に来て交流を行う形が主流となった。
2020年10月	新型コロナウイルス感染拡大の懸念、長期休校の影響から、ASEPのオンライン開催を決定。
同年10月	パートナー校を決定。各校ごとにオンライン交流を開始。
同年12月	ASEP、初のオンライン開催。

海外の大学との連携による取組み 【長野県須坂高等学校】

イギリスからの講師を招聘し、３日間英語漬けで学習をする「English in Action」が中止となった。その代替として、オンラインと対面のハイブリットによる、1学年全員（240名）が３日間英語漬けで学習をする「須坂アカデミックチャレンジwith Harvard Students 2020」を実施。オンラインの強みを生かし海外と教室を直接結ぶ一方、対面授業では多様な国籍のインストラクターによるワークショップで生の英語を体験。多様な価値観に直接触れることで、グローバルな視点とクリティカルな思考を養い、英語力とコミュニケーション能力の向上、海外留学への意識の向上を図った。

【プログラムの内容】

・3日間のプログラム

○Harvard Talk Session：ハーバード大学生とオンラインで意見交換。海外大学生と直接対話することで、異文化理解と学びの方法を知る。

○Online HBSワークショップ：ハーバード大学卒業生が、Conformity（順応性）と過労死問題についてワークショップを実施。

○JAAC（日本学術センター）ワークショップ：日本在住のオーストラリア人、エジプト人、シエラレオネ人、オランダ人の講師を招聘。対面で４つのワークショップを英語で実施。（How should we evaluate students? / Art as Activism / Egyptian Hieroglyphs / SGDs in Japan)

【工夫した点】

・1学年（６クラス 240名）全員が３日間で全てのプログラムを体験。全員が参加することで、「信州グローバルハイスクール」実践校1年目のミッションを遂行し、英語力向上だけでなく、各自の将来のキャリアについて考える機会とした。

・最終日には、3日間の学習の成果として、地元を紹介するプレゼンテーションを各ＨＲで実施。

・オンラインのメリットを生かし、ハーバード大学学生とライブでディスカッションすることで、実践的な英語力の向上とグローバルな視点の涵養を図った。

【今後の課題】

・事前学習のありかたと、授業や実施学年との連携。経費。

【経緯】

2018年～	文部科学省「国際文化交流促進費」補助事業により学校主催海外研修開始(マルタ共和国、シンガポール共和国)
2019年～	長野県サイエンスアソシエーションプロジェクトにより学校主催海外研修開始（スリランカ民主社会主義共和国、タイ王国）
2020年4月１日	長野県教育委員会より「未来の学校：信州に根差したグローバルな学びを推進する高校」実践校として指定を受ける。
同年11月25～27日	「須坂アカデミックチャレンジwith Harvard Students 2020」を開催。成果と反省を生かし、来年度は1・2年生で実施予定。

海外の大学との連携による取組み 【静岡市立高等学校】

SSH指定校である本校は、「市高科学教育プログラム（Ichiko Science Education Program 通称ISEP）の開発～科学的リテラシーをもって解決困難な課題に立ち向かえる人材の育成～」を課題として掲げ、研究開発に取り組んでいる。科学探究科にあってはすべてのプログラムの集大成として「海外科学研修（アメリカ合衆国・カリフォルニア）」を位置付け、毎年、科学探究科２年生全員が参加する。しかし、今年度は新型コロナウィルス感染拡大の影響を受け、研修の中止を余儀なくされた。静岡市の姉妹都市であるストックトン市の高校生との交流や、ヨセミテ国立公園でのフィールドワーク等は断念せざるを得なかったが、スタンフォード大学での２本の講義だけはオンラインで実施し、研修の一部を代替した。

【プログラムの内容】

海外科学研修の主たる目的は、最先端の研究や文化に触れる機会を通して科学・技術への好奇心や探究心を高めるとともに、それらに携わる人たちとの出会いを通して自らの進路について視野を広げ、「国際社会で活躍・貢献できる人材」のイメージ具体化の一助とすることにある。スタンフォード大学では「再生医療」に関する講義や研究施設の見学、カリフォルニアで活躍する日本人研究者によるキャリア形成に関する講義を予定していた。これらの講義をオンラインで実施することを通して世界で活躍する研究者と交流し、自身の生き方・あり方について考える機会とする。

【工夫した点】

スタンフォード大学教授による講義は英語で行われることから、例年、講義内容の理解につなげるために事前研修を行っており、 かつて同教授の下で研究員を務めた経験を持つ日本人研究者に講師を依頼している。同氏は本校の海外科学研修の協力者であり、今回の代替講義も同氏の計らいによって実現した。

【今後の課題】

例年、現地では英語による質疑応答が活発に展開されるが、オンライン講義ではそれが難しかった。例年は現地の雰囲気が生徒の挑戦意欲を後押しするが、教室ではその雰囲気を作り出すことができにくかった。

【経緯】

2011（平成23）年	科学探究科が新設され、2012年よりロサンゼルスを中心とする海外科学研修を開始、2013年からSSH指定を受ける
2015（平成27）年	研修のコースをサンフランシスコ中心に変更、スタンフォード大学での研修（含：事前研修）が始まる
2020（令和２）年４月	コロナ禍を受け海外科学研修の中止を決定するが、スタンフォード大学事前研修は実施することを決める
2020（令和２）年９月	スタンフォード大学元研究員による事前研修を実施、オンライン講義の可能性を模索し始める
2020（令和２）年11月	オンライン講義実施

海外の大学との連携による取組み 【京都府教育委員会】

文部科学省ＷＷＬコンソーシアム構築支援事業の取組みとして、事業拠点校の鳥羽高等学校10名と事業共同実施校の福知山高等学校10名を対象とし、オーストラリアのクイーンズランド工科大学によるオンライン授業を実施。ICT機器やアプリケーションの使用方法を工夫することで、協働的な学びと効果的な英語学習を両立するプログラムを研究開発。

【プログラムの内容】

・80分のプログラム。１人１台のiPadを使用、Zoomにより接続。テーマは “Celebrating Cultural Differences”
・実施内容（使用アプリケーション：使用方法）
　① テーマ及び語彙の理解（Kahoot：クイズ形式による効果的な語彙習得）
　② 大学教員による講義　（Mentimeter：講師によるアンケート実施と集計）
　③ グループディスカッション（Socrative：チーム対戦のクイズによる協働学習）
・事後学習として、授業内容やチーム内で話し合った内容についての英文エッセイを作成し、大学教員からフィードバックを受けた。

【工夫した点】

・ICT機器を活用することで、全生徒が協働しながら参加できる活動を取り入れた。
・プログラムの各実施内容に適した、海外でも使用されているアプリケーションを選んだ。

【今後の課題】

・総合的な探究の時間や英語の授業との関連を明確にし、より効果的な取組みとする。

【経緯】

2016（平成28）年11月	府教育委員会とクイーンズランド教育訓練省が協力協定を締結。以降継続し、現在に至る。
2020（令和元）年11月	クイーンズランド工科大学によるオンライン授業を府立高校２校の生徒を対象として実施。
同年12月	事後学習として、英文エッセイを作成。※ＷＷＬ海外交流アドバイザーがファシリテータとして運営を支援

海外の大学との連携による取組み 【島根県立隠岐島前高等学校】

本校では例年、２年次に全員がシンガポールでの海外研修に参加するが、今年度は新型コロナウイルス感染症により、渡航することが叶わなかった。
２年生は１年もの時間をかけて地域課題解決型の探究学習に挑み、その成果を英語で発表するというのがシンガポールでの大きなミッションとなっていることから、オンラインで代替できる方法はないか模索した。結果的に、隠岐島前地域内で実施した「英語プレゼンテーション」に、本来訪問する予定であったNational University of Singaporeの外国人学生、立命館アジア太平洋大学の外国人留学生、島根大学の外国人留学生、隠岐島前地域でALTとして活躍する外国籍の方々を対象に、全員がオンラインでの英語プレゼンテーションを実施し、発表に対して建設的な質問やコメントを寄せていただくことができた。

【プログラムの内容】

３～４人組の生徒が３会場に分かれ、Zoomでつながっている相手に対して画面共有し、10～15分の英語プレゼンテーションを実施。発表に対して、同じく10～15分程の時間を使って質疑応答、コメントなどを寄せていただいた。

【工夫した点】

聴いている側が疲労することを考慮し、会場を３つに分けた。また、当日参加者を対象に英語教員らが学年部と協働し、事前レクチャーを実施した。生徒たちがプレゼンテーションに集中できるよう周辺機器や接続等は教員チームで構築した。

【今後の課題】

参加者のアジア諸国での多様性はあったが、時差の関係で欧米諸国が参加しづらい時間となり、世界的にみると多様性を担保し切れたとは言い難い状況であった。

【経緯】

5月	シンガポール海外研修の実施を中止
10月	国内候補地を選定するものの、新型コロナウイルスの状況が読めず、島前地域での実施を決定
12月	NUSや立命館アジア太平洋大学、島根大学にコンタクトを取り、趣旨を説明
1月末	参加者への事前レクチャー
2/3	当日
2/10	参加者との振り返り

海外の大学との連携による取組み 【愛媛県立西条高等学校】

本校が2013（平成25）年より実施していた「イギリススタディーツアー」が中止となった。そのため、代替としてこれまで提携してきたイギリスのキャリーウィズ・カレッジと連携したプログラムを企画・実施した。また、京都大学地球環境学堂の留学生等対象に、科学分野の研究発表会を英語で行った。実施時期:令和２年９月～令和３年３月末、参加者:第１学年希望者33名（国際文理科20名・普通科12名・商業科１名）

【プログラムの内容】

・キャリーウィズ・カレッジのバーチャルツアーに参加した。
・地域を素材とした８つのテーマについて英語で動画を作成し、キャリーウィズ・カレッジへ送信した。
・物理・化学・生物・地学分野における科学研究発表を英語でまとめ、京都大学の西前出教授の研究室に所属する留学生に対してプレゼンを実施、質疑応答を行った。

【工夫した点】

・科学実験では、専門用語を英語で事前指導した。
・キャリーウィズ・カレッジへ送信した動画は、事前に関心の高いテーマ を調査した。
・科学研究発表では、時差のない国内の留学生に対して行った。
・キャリーウィズ・カレッジとのデスカッションにおいては、時間を短縮できるように、事前に動画を送付し、視聴・評価をいただいた。
・動画を作成するにあたり、住友金属鉱山株式会社や四国電力などの地元企業と連携を取り、協力を得た。

【今後の課題】

・本年度は様々な研修を短期間で行ったため、研修日程がタイトになった。日程や研修内容についての検討が必要である。

【写真】
① 各班作成動画視聴
② 京都大学とのオンライン科学研究発表会
③ 校内科学研修の様子

【経緯】

2013（平成25）年３月	イギリススタディツアー開始。以降、10名～20名程度の１年生をおよそ２週間に渡って毎年派遣。
2020（令和２）年６月	イギリススタディツアー中止に伴い、代替案による研修会を企画。
同年９月～12月	校内研修・動画作成等の活動　キャリーウィズ・カレッジに動画送付（12月24日）。
2021（令和３）年１月	京都大学とのオンライン科学研究発表会実施。
同年３月末までに	キャリーウィズ・カレッジとの制作動画に関するオンライン意見交換会を実施予定。

他機関との連携による取組み 【愛媛県立松山東高等学校】

毎年、愛媛県国際交流協会が受け入れている短期インターン生（ハワイ大学の学生）を本校に招いて、文化交流を行っている。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、インターン生が来日できなかったため、オンラインで交流することができないかと相談したところ、本校主催の「International Day」において、元インターン生４人との交流を実施することができた。ICTの活用が大変進んでいるハワイ側からは、オンライン実施の様々な工夫や、新しいアプリケーションソフトを使った活動などを教えていただき、大変参考になった。

【プログラムの内容】

・日本から①学校紹介②文化と季節に関するクイズ、ハワイから①一人一人からの自己紹介と文化紹介（地理・歴史・食べ物・フラダンス・音楽など）②iPadを使ったクイズとゲーム、質疑応答を行った。
・インターン生のうち一人は、アメリカ本土の実家からオンラインミーティングに参加した。

【工夫した点】

・毎年実施してきた活動であり、途切れることのないよう、メールで打ち合わせを綿密に行った。どちらもプレゼンテーションばかりにならないよう、体を動かしたり、バリエーションの多い活動になるよう工夫した。

【今後の課題】

・接続テストをはじめ、準備に大変な労力がかかる。

【経緯】

2014（平成26）年～	SGH部での活動「International Day」の一環として、インターン生を招待し、活動を実施。
2020（令和２）年４月	インターン生の来日中止の知らせを受け取り、オンラインで交流できないか打診。
2020（令和２）年６月	オンラインでの「International Day」を実施。

海外や国内の大学との連携による取組み 【福岡県立鞍手高等学校】

２年次の課題研究の実地調査と異文化体験を目的としたマレーシア・シンガポール海外研修が中止になったため、その代替として、ビデオ会議ツールを用いて、SDGsに関する諸問題についての協議や異文化理解のための交流を実施。本校２学年人間文科コースの生徒３７名が参加し、海外の大学生や国内の留学生と質疑応答や文化体験、意見交換等を実施。

【プログラムの内容】

・２日間のプログラム

○１日目…帝京マレーシア日本語学院、ニューヨーク州立大学バッファロー校（シンガポールキャンパス）の日本語を学ぶ学生と交流

(1)本校生徒による日本文化・鞍手高校についてのプレゼンテーション

(2)課題研究テーマに関する質疑応答[教育・人権・宗教・経済・資源エネルギー・健康・ジェンダー・労働]

(3)英語による自由交流

○２日目…福岡教育大学に在籍する留学生・外国人学部生と交流

(1)本校生徒による日本文化・鞍手高校についてのプレゼンテーション

(2)フランス・ブラジル・韓国の文化に関するインタビュー活動

(3)「外国について学んだり、研究したりするときに大切なこと」をテーマに意見交換

【工夫した点】

・日本語を学ぶ学生に依頼することにより、相互の異文化理解を促進

・小グループで生徒が英語で発言できる機会の確保

【今後の課題】

・継続的な交流の機会の確保

【経緯】

2010(平成22)年８月	マレーシア・シンガポール海外研修を実施。本校人間文科コースが参加。
2015(平成27)年４月	文部科学省事業「スーパーグローバルハイスクール」に指定される。以降、毎年海外研修を実施。
2020(令和2)年７月	新型コロナウイルス感染症の影響により、2020(令和２)年度の海外研修の中止が決定。課題研究の実地調査が困難になったため、現地の学生に協力を得て、オンラインでの交流を検討し、実施。
同年９月～１２月	休み時間や放課後を使ったオンラインによる継続的な交流。

海外の大学との連携による取組み 【福岡県立久留米高等学校】

フィリピン大学のマーク・カンシーノ教授とオンラインでつなぎ、2019年(令和元年)8月30日に１年英語科４１名を対象に「異文化理解」の授業を実施した。遠隔教育システムを活用して海外の専門家からディベートの助言をもらうことで、学習活動の幅を広げ、学びを深めることで多面的な見方を身に付けさせることを目的とした。

【プログラムの内容】

クラス：1年英語科 41名(異文化理解)
教　材：『Q: Skills for Success READING AND WRITING 3B』(OXFORD出版)
内容：(1)Agree or disagree：Japanese companies should hire more foreign workers
(論題：日本企業は、外国人労働者をもっと多く受け入れるべきである。是か非か。)［英検2018年度第３回準１級］
①ディベート論題の論点についてブレーンストーミング
②立案論の作成とその検討、各論点への反論作成、再構築の流れ等の演習
(2)「大学入試の4技能化に対応したエッセイライティング　～argumentative essayの書き方～」

【工夫した点】

・交渉は電子メールを活用した。
・内容と英語が高度なため、事前学習でカンシーノ教授からの講義資料を配布してブレーンストーミングを行った。カンシーノ教授に、ゆっくり平易な英語で話していただくように依頼した。
・フィリピンのディベート全国大会優勝者ともつなぎ、同世代として助言を頂くことで、生徒のモチベーションの向上につながった。

【今後の課題】

・ディベートやエッセイライティングの専門家の継続的な確保が難しい。学校外の人的・物的資源を積極的に活用して、社会に開かれた教育の実現を目指したい。

【経緯】

2018(平成30)年11月	平成30年度「遠隔教育サミットin長崎」（長崎県教育委員会主催）視察。
2019(平成31)年3月	文部科学省「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策方針」公表。
同年4月	フィリピン大学のマーク・カンシーノ教授と交渉開始。オンラインによる授業に向けて準備・計画開始。
2019(令和元)年８月	遠隔教育システムを用いて、専門家を活用したオンラインによる授業実施。
同年11月	令和元年度「遠隔教育サミットin長崎」（長崎県教育委員会主催）視察。

海外の大学との連携による取組み 【熊本県教育委員会】

県主催の米国大学派遣プログラムが中止になったため、その代替として、県教育委員会に配置された留学支援員を活用して、オンラインによる語学研修・異文化体験研修(州立モンタナ大学による大学レベルの英語学習や、異文化を学ぶ研修)を実施。県内の高校生40名が参加し、2020(令和2)年8月に4日間の日程(1日あたり3時間程度)で実施。

【プログラムの内容】

・4日間のプログラム

〇Business & Technology：　教育やビジネスで活用できる通信技術について学ぶ。

〇English Language Instruction：　大学レベルの「話す」「聞く」「読む」「書く」技能を磨く。

〇Cultural Engagement：　州立モンタナ大学の学生や地域住民と電子メールやビデオチャットを通して交流やアンケート調査を行い、日本と異なる文化について学ぶ。

・研修最終日には、学んだことを州立モンタナ大学の学生や地域住民とグループディスカッションする機会を設ける。

・受講証明書の発行

※参加生徒の感想には「現地の学生と実際に交流する中でアメリカと日本の相違点を知ることができた」など好意的な感想多数。

【工夫した点】

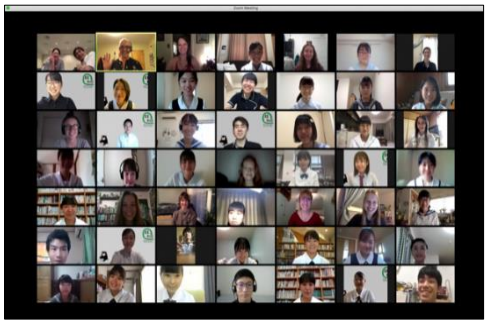
・生徒と県教育委員会で事前に日を設けてZoom接続確認

・大学担当者との交渉は電子メールにより準備

・生徒20名に対し講師１名を依頼

・小グループで生徒が発言できる機会の確保

・校種のバランスを考えた参加生徒の選考



【今後の課題】

・自宅等でインターネット環境が整っていない生徒への更なる支援

【経緯】

2013(平成25)年6月	県教育委員会と米国モンタナ州立モンタナ大学の間で、Memorandum of Agreement に基づく派遣協定を締結。その後毎年、約20名の生徒を派遣し、約２週間の語学研修を実施。2019（令和元）年度までに延べ144名を派遣。
2020(令和2)年6月	文部科学省補助事業「グローバル人材育成の基盤形成事業(国際交流・留学環境整備事業)」に採択され、留学機運醸成のための留学支援員を県教育委員会に配置。語学研修に関して大学との交渉を担当し、県教委へ助言。
同年6月	新型コロナウイルス感染症の影響により、2020(令和2)年度のモンタナ派遣研修の中止が決定。その後、県教育委員会主催でオンライン開催を検討。定員を上回る希望者のため定員を40名に増加。
同年8月	オンラインによる語学研修・異文化体験研修を開始。※ 留学支援員がファシリテータとなって運営に従事。

海外の大学との連携による取組み 【熊本県立水俣高等学校】

学校主催の海外研修（シンガポール）が中止となったため、その代替事業として、２年前の研修実施先である州立モンタナ大学とZoomを用いてオンライン学習プログラムを実施（同様の事業を県が令和２年８月に実施）。プログラムは本校のテーマに沿った環境問題及びその対策等に関する講義や、大学生ボランティア等による意見交換等を含む内容で、令和２年１２月から令和３年２月の６日間（１日３時間）の日程で行い、１０名が参加した。

【プログラムの内容】

・６日間のプログラム
　①自己紹介・Clark Fork Riverに関する講義
　②プレゼンスキルに関する講義・「苦海浄土(石牟礼道子 著)」に関する講義
　③プレゼンスキルに関する講義・Libbyにおける金属汚染に関する講義
　④プレゼンスキルに関する講義・Anthropocene(アントロポセン)に関する講義
　⑤Glacier National Parkおよび気候変動に関する講義
　⑥最終プレゼンテーション
・大学生や職員とのオンライン意見交換(１時間程度)をすべてのプログラムで実施

【工夫した点】

・最終日に生徒がアメリカの環境被害地区をリサーチしてプレゼンテーションをするプログラムとした。
　初回から５回目までの講義で最終プレゼンに活用できる知識や技術を学ぶことができる内容となっており、また、毎回の意見交換の時間に大学生等にリサーチ内容についてインタビューできるようにした。
・次回のプログラム内容を予習できる課題(リスニング・リーディング)を課した。

【今後の課題】

・次年度以降も継続するための資金の確保。

【経緯】

2018年（平成30年）10月	SGH事業に係る海外研修を州立モンタナ大学で実施。（９日間）
2020年（令和２年）４月	新型コロナウイルス感染症の影響により、海外研修(シンガポール)の中止が決定。
2020年（令和２年）８月	県の事業を参考に、オンラインによる研修について同大学と交渉開始。
2020年（令和２年）11月	研修参加者の募集開始

海外の大学との連携による取組み 【大分県教育委員会】 ※県立高校及び私立高校の生徒対象

＜スタンフォード大学遠隔講座＞
◎スタンフォード大学と大分県教育委員会が共同で提供する県内の高校１～２年生向け同時双方向型オンライン遠隔講座。
◎スタンフォード大学国際多文化教育プログラムのインストラクターと現地起業家等による講義、ディスカッションやプレゼンテーションを通じて、英語で世界と渡り合えるグローバル人材の育成を目指す。
◎令和２年度は、１０～３月の間に全１０回を実施し、グローバルリーダー育成塾から希望者３０名（県内１９校）が参加。
※グローバルリーダー育成塾：グローバルリーダーの育成を目的とした高校１～２年生向け年間プログラム。世界で活躍する講師による講演や、高校生同士、更には留学生等を交えた協議発表により構成。世界が抱える課題について解決策を模索。令和２年度は”対面＆遠隔“のハイブリッド方式で全３回実施し、４０５名が修了。

【プログラムの内容】

①事前課題：スタンフォード大学から配信される動画の視聴＋文献の閲読
②当　　日：インストラクターと各回のゲストスピーカー等による講義＋質疑応答＋意見交換
③事後課題：専用オンライン掲示板上での意見交換＋課題レポート提出
※受講生は「世界の課題解決に向けて私ができること」をテーマに、１人５分最終プレゼンテーション。
※成績優秀者２名はスタンフォード大学で行われる表彰式に出席予定（感染症の影響で延期）。

【工夫した点】

各講座のテーマを受講生の興味関心に合わせて、「日米関係」「シリコンバレーと起業家精神」「SDGｓ」等に設定。

【今後の課題】

オンラインで世界とつながる機会の拡大　→　立命館アジア太平洋大学と連携したバーチャル留学「オンライン・グローバル・キャンパス」を開始。

【経緯】

令和元年８月	スタンフォード大学と遠隔講座”Stanford e-Oita”の実施で合意（“Stanford e-Japan”を大分県向けにカスタマイズ）
令和元年９月	第１期「スタンフォード大学遠隔講座」開始
令和２年３月	第１期「スタンフォード大学遠隔講座」終了（修了者３０名）
令和２年９月	第２期「スタンフォード大学遠隔講座」開始（令和３年３月終了予定）

海外の大学との連携による取組み 【沖縄県立与勝高等学校】

カデナハイスクール（米軍基地内）との交流が中止となったため、その代替として、タイのコンケン大学教育学部の学生との1ON1でオンライン交流会を実施した。コンケン大学教育学部日本文化学科3年生（21名）、本校からは3年生（26名）が参加し、初めはウォームアップとして全体でタイについてのクイズ、日本についてのクイズをお互いに出題し、大いに盛り上がった。その後はブレイクアウトルームで1対１でタイの学生がタイについてのプレゼンテーションを日本語で行い、本校の生徒が質問をした。今後は、タイの教育学部の学生が理科を英語で行い、本校の生徒が受講し、プレゼンテーションで学んだことを発表する。

【プログラムの内容】

- 全体テーマ：「タイ×沖縄　文化交流プログラム」
- 事前：　（タイ）プレゼンテーション準備（日本の高校生にタイについて紹介する）
  （日本）：英文記事等からタイについて調べ質問を準備する
- 前半：コンケン大学生はタイについて、本校生徒は日本や沖縄についてのクイズを出しあった。
- 後半：ブレイクアウトルームでペアに分かれ、コンケン大学がスライドを使ってタイについてのプレゼンテーションを日本語で行った。本校生徒はプレゼンについての質問を行い。その後は英語や日本語でフリートークを楽しんだ。
- 事後：それぞれのペアへ手紙を英語で書いてメールにて送信した。

【工夫した点】

- タイの学生が日本語でプレゼンテーションを行うため、本校の生徒は事前準備のクイズや質問の準備はすべて英語の記事やニュースから探して作った。
- ウォームアップは全体で行い、慣れたところで個別での交流になるように計画した。

【今後の課題】

- 生物や日本史などの他教科を英語で交流するプログラムを計画している。他教科の先生たちの協力が必要となってくる。

【経緯】

8月13日	タイのコンケン大学の先生とオンラインで生徒同士の交流が出来ないか意見交換をSNS上で開始。
8月18日	オンライン交流会実施を決定。技術的なサポートを「まちなかハローワールド」にサポートしてもらう。
10月13日	オンラインで打合せ。タイの学生→プレゼン準備、本校生徒→英語記事をもとに質問やクイズ作成
10月28日	オンライン文化交流会実施